
バカとバカでワグナリア

SHIN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとバカでワグナリア

【Nコード】

N7376Y

【作者名】

SHIN

【あらすじ】

バカとテストと召喚獣とワーキングのコラボです。ババア長から頼まれた明久たちのバイト先はなんとワグナリア。小鳥遊たちが文月に来て明久たちとどのように仕事？をするのか。うまくコラボ出来るかわかりませんが（そのうえきつと駄文になるとは思いますが）頑張るので応援お願いします。

プロローグ（前書き）

バカテスのプロローグです。

ブローグ

今日はなんて幸せな日なんだろう

この鉄人のHRが終わればぼくたちは約二ヶ月は自由なんだ！！

「よしこれが最後だ。」

明日から夏休みが始まるわけだが」

そう明日からは姫路さんたちといつでも遊べるんだ！！

「もちろんわかっているとは思うがしつかり補習には出るように」

「なんだと鉄人。」

まさか夏休みにまで学校に来させるなんて」

「それはお前らの学力が悪すぎるからだ！」

「俺は明久ほどバカじゃないぞ」

「クラス全体が低いんだばか者。」

とまあ注意はこれぐらいにしておいて坂本に吉井後で校長室に行くように。以上だ」

鉄人はそう言っで教室から出て行った

「明久に雄二よ、次はいつたい何をしたんじゃ？」

「なにもやってないよ。」

「ねえ雄二？」

「今回はいつたいなんの用事だつてんだ」

「とりあえず行った方がいいんじゃない？」

「そうですよ。」

私たちは夏休みの予定を立てておくので早く帰ってきてくださいね」

「／／もちろんだよ」

「明久、さつさと行くぞ」

「うん」

ババア s i d e

「邪魔するぞ、ばばあ」

「全くあんたたちはノックつてものと敬語つて言つ単語を知らないのかい？」

「そんなことよりいつたいなんのようですか？」

「そうだったね。」

今日あんたたちを呼んだのはちよいと頼みたい事があつてね」

「「丁重にお断りします」」

「まあまあそういわず内容を聞きな」

「まあ一応聞いておくとするか」

「そうだね」

「ちよいとあるところでバイトをしてほしいんだよ」

「バイト？」

「もちろん給料も出るよ」

「ぼくはいいと思うよ。」

雄二は？」

「そうだな。」

まあ悪い話じゃないし乗るか」

「そうかい。」

それは助かるよ。」

じゃあ明後日に朝10時にワグナリア文月店に行っておくれ」

「俺たち以外の参加は却下か？」

「大人数にならなきゃ誘ってもかまわないさね」

「わかった」

「それじゃあ頼んだよ」

ガチャ

よしもういいさね

プルルル

「もしもし」

「ああ私だよ。

頼まれていたバイトの件だけど何人か行くように行ったから明後日は頼んだよ」

「ありがとう。助かるよ。じゃあ」

明久side

「お帰りなさい」

「ただいま姫路さん」

「……雄二遅い」

「翔子！？どうしてここに」

「……雄二がここに帰ってくるってわかったから」

「もちろん、僕もいるよ」

「まあいい。

とりあえずみんなに話がある」

「雄二よいったいどうしたのじゃ？」

「ああとりあえず説明するから聞いてくれ」

「事情を説明中」

「つと言っわけで一緒に来たいやつはいるか？」

「見事に全員だね」

「まあいいだろ」

「じゃあ明後日の朝10時にワグナリア文月店に集合だ」

「「「「「了解^{了解}（よ）」「「「「「」

「どうしてみんなは参加したいの？」

「・・・俺は新しい機材のため」

「それでなにをするのかは聞かないことにするよ・・・
秀吉は？」

「ワシはまあ演技の練習じゃな」

「僕はムツツリー二君に制服を見せるためかな／＼／」

「ブシャアアツアアアア」

「・・・愛子恥ずかしがるなら言わなければいい」

「恥ずかしいんじゃないよ」

「ウチは遊ぶための資金作りよ」

「いろんな理由があるんだね。」

「じゃあ姫路さんは？」

「／／それはえーっと料理の練習です」

この発言によりその場の空気が凍った

「えっと姫路さんは接客の方が向いてると思うよ」

「そうですか？わかりました。」

「じゃあそうです」

正直私は明久くんがいるから行くだけですから

「よしじゃあまあ今日は帰るか」

「そうだね」

「・・・雄二早く帰ろう」

「そうだな。」

みんな明後日は遅れるんじゃないぞ」

「ではワシは部活のものに話をつけてくるのじゃ」

「葉月がもう家にいるはずだから家は帰るわ」

「ムツツリー二君はこのあとどつするの？」

「・・・新しいカメラを見に行く」

「僕も行つていい？」

「／／／勝手にしろ」

「それじゃあ早く行こつよ」

「・・・そうだな」

「それじゃあ姫路さん帰ろつか」

「そうですね」

姫路さんと二人つきりで下校

なんて幸せなんだ

そのうえ一緒にバイトも出来るなんて

でもなにか話題をふらなきや

そうだ

「もしかして工藤さんってムツツリー二のこと好きなのかな？」

「いついきなりどつしたんですか！？」

「そおならいいなーって思っただけだよ」

「そうなんですか」

全く人のこととなると敏感なんですね
まあいいです

明後日からはバイトで会えるので

「それじゃあ姫路さんまた明後日」

「あの明久くん」

「どうしたの？」

「明後日道に迷っちゃ行けないので一緒に行きませんか？」

「ぼくとしても助かるよ」

「じゃあ9時半にここでいいですか」

「うん」

「明久くん遅刻しないでくださいよ」

「もちろんだよ」

「お願いしますね」

そうしてぼくたちは帰っていった

いやー今日は本当になんて幸せなんだろう

夏休み姫路さんと会う口実も出来たしお金も入るし一緒に帰れるし
楽しいバイト生活が送れそうだ

この時のぼくはまだしるよしもなかった。
あんな恐ろしいことになるなんて・・・

ブログ（後書き）

次はworkingのブログをのせるつもりです。
出来れば読んでやってください。

感想、アドバイスお願いします。

もう一つのプロローグ（前書き）

workingのキャラ紹介です。

たかなしそつた

小鳥遊宗田

高校一年生 フロア担当

極度のミニコン

伊波さんについて葛藤中

伊波まひる（いなみ）

高校二年生 フロア担当

小鳥遊のことが好きだが男性恐怖症（男を見ると無条件で殴ってしまふ力は無駄につよい）のせいでなかなか前に進めないでいる

種島ポプラ（たねしま）

高校二年生小鳥遊と同じ高校 フロア担当

びっくりするぐらい小さい

それを除けばしっかりもの

さごつじゅん

佐藤潤

大学生 キッチン担当

見た目は怖いが周り気を回せる優しい男性

八千代に片思い中

とじろぎやちよ

轟八千代

フリーター フロアチーフ

腰に刀を刺しているところ以外は完璧

ちよつと天然ではあるがしっかりもの

・杏子ラブだが佐藤くんのことをどうみてるかわからない

白藤杏子しらふじ きょうじ

雇われ店長

もとやん

仕事をしない店長

相馬博臣そうまひろおみ

大学生 キッチン担当

どこからか情報を仕入れてくる謎の人物
とても腹黒い

山田葵やまだあおい

年齢不詳多分中学生 キッチン担当

山田は偽名で本名は一応知られていない
家出少女でとりあえずミスを連発する

音尾兵庫おとのおひょう

本社の人間

本来1番地位が高いはずだが人柄と店にめったにいないことから雑
に扱われる

見た目は怖いが周りに気を回せる優しい男性

もう一つのプロローグ

「いやー今日はお客さんが少ないので暇ですね〜先輩」

「そうだね」

そう言つて必死に手を伸ばして皿を置こうとする先輩

「やっぱり先輩はいつもちっちゃくて可愛いですね」

「ちっちゃくないよ!〜!」

しばらく先輩を愛でていると急に

「キャー」

「いつ伊波さん!?

どうしたんですか?」

「おおお男が」

「伊波さんよく見てください。」

これは空気さんじゃないですか?」

「あっ本当だ。」

空気さんお久しぶりです」

「じゃあ伊波さん着替えてきてください」

「うんそうするね」

「音尾さんお久しぶりです」

「久しぶりだね、小鳥遊君」

「今日はどうしたんですか？」

「そのことだけちょっと店長にお話があつてね」

「ついに辞めさせられるんですか!？」

「ちっ違（杏子さんを辞めさせるって本当ですか？）うよ。
って轟さん人の話を聞いて。
店長には続けてもらうから」

チーフ真剣はリアルにやばいですって

「じゃあ店長呼んできましょうか？」

「私ならここだぞ」

「杏子さん」

「俺は仕事に戻りますね」

「しっかり働けよ。
でっ音尾どうしたんだ」

「実は本店の方から文月に店をだすからそこに何人が派遣するよう
に言われたんですよ」

「でっ私に行けと?」

「お願いしてもいいですか?」

「嫌だ。」

お前が行け」

「そこをなんとか。」

文月には美味しいものがたくさんあるので」

「食い物があるのか・・・よし任せろ」

「お願いします。」

来週の10時にこの場所に言ってください。

そこであっちのバイトの子と落ち合うことになってるので」

「わかった」

「ではお願いしますよ」

「じゃあ八千代仕事が終わったら集まるように言っといてくれ」

「はい、杏子さん」

「あつ佐藤くん」

～事情説明中～

「ということなの」

「了解」

「じゃあ相馬くんにも伝えておいてね」

「珍しく店長ののろけ話聞かなくてすんだね、佐藤くん」

「相馬には言う必要ないな」

「佐藤くんひどい!!」

「どうせもうしつてんだろ？」

「まあもちろん知ってるよ。」

「ちなみにくる人も二人はわかるよ」

「へーどんな人が来るんですか？」

「小鳥遊くんやっぱり興味あるの？」

「興味といますかこんな危険地帯で仕事してくれるのかと思います」

「そうだね」

「一人は物凄いバカでもう一人は賢いけど・・・バカな人かな」

「それってどんなだよ・・・」

「皆さんなんの話をしてるんですか？」

山田も混ぜてください」

「うーんとね」

「再び事情説明中」

「面白そうです。」

山田も行きたいです」

「多分行くことになると思うよ」

「そんなことよりさっさと運べ」

「わかりました」

「やっと終わりましたね」

「小鳥遊君お疲れ様」

「先輩こそお疲れ様です。」

伊波さんもお疲れ様です」

「うん、お疲れ様」

「よし全員揃ったな。」

多分聞いたと思うが来週から文月というところに派遣に行くからそのつもりで頼む。

無理な者は明後日までに無理と言ってくれ。
連絡終了。八千代帰るぞ」

「はい、杏子さん。
みんなお疲れ様」

「よし俺も帰るか。
種島車乗るか？」

「佐藤さんいいの？」

「じゃあダメだ」

「佐藤さんの意地悪!!」

「嘘だ。」

「さっさと乗れ」

「みんなおつかれー」

「先輩お疲れ様です」

「相馬さん今日こそは一緒に帰っちゃったんですか!?!」

「さて伊波さん、俺達も帰りましょうか？」

「そうだね。」

「山田さんお疲れ様」

「お疲れ様です」

「文月に行くの楽しみですね？」

「そうだね。

でも・・・」

「どうしたんですか？

ああ男がいないかですね？」

「うん」

「大丈夫ですよ。

俺がいるじゃないですか」

「／／／そうだね」

意味は違うつてわかっていてもちよつと照れちゃうな／／／

「伊波さん顔紅いですけど大丈夫ですか？
もしかして熱でも」

「大丈夫だよ」

「そうですか。

ここでお別れですね」

「うん。

いつもありがとね」

「気にしないでいいですよ。
それではまた明日」

「うん」

そして文月に全員出発することになった

もう一つのプロローグ（後書き）

お気に入り登録してくださった皆様ありがとうございます。

こんな駄文ですがこれからも頑張るのでよろしく願います。

感想、アドバイスあったらお願いします。

仕事説明？（前書き）

Eduaidさん感想ありがとうございます。

それではどうぞ

仕事説明？

ちゃんと姫路さんとの集合時間にも間に合いワグナリアに着いた

「姫路さんちよつと早く来すぎちゃったね」

「そうですね。」

まさか10分で着くとは思ってませんでした」

「どうしよっ」

「きっと皆さんもうすぐ来ますよ」

「そうだね」

噂をすれば

「明久に姫路早いな」

「雄二こそ」

「ちよつといろいろあつてな（主に翔子が原因だな）」

「皆のものおはようなのじゃ」

「おはよう秀吉」

「ちょうど島田も来たみたいじゃの」

「ごめん待った？」

「ではついてきてください。

あと男性の方に忠告なんですけど（トン）
あつすみませんって伊波さん!？」

「キヤー」

ドスン

どうしてさっきのは店員さんは殴られてるの!？」

「小鳥遊くんごめんなさい」

「いえこちらこそすみません。

それよりあの部屋なのでお願いします」

ちよつとつていうかだいぶ心配だけとりあえず部屋に行かないとね
そしてぼくたちは扉の前に着いた。
やばい緊張してきた

「「「「「「失礼します」」」」」」

中には女性が二人と男性が一人いた

「お前らがこっちのバイト組か。
とりあえずイスに座ってくれ。

足りない分は後ろのイスを適当に使ってくれ」

おかしいぼくの目はついにダメになってしまったのかもしれない
だって・・・帯刀してる女性なんているわけないもの

つとそんなことを思っていると雄二が

「明久、悲惨な表情をしてるってことはお前にもあの刀が見えるんだな」

「そうか雄二にも見えてるんだね。
あれっておかしいよね!？」

「ああ。

あれは異常なはずだ。

まあ諦めるしかないか」

「そうだね」

まあムツツリーニも常にカメラを常備してるからね

「今日はよく来てくれたな。

私はここの店長の白藤杏子だ。

私は仕事とかしないからこの二人にキッチンとフロアの説明をして
もらうからよく聞くように」

「「「「「「「「はい」「」「」「」

って店長が仕事しないっていいの!？」

「佐藤くん私からいくわね」

「どうぞご勝手に」

「皆さんこんにちわ」

「「「「「「「「こんにちわ」「」「」「」

「私はフロアチーフの轟八千代です。
今日からお願いしますね。」

えーっとフロアの主な仕事はお客様にお料理を運んだりお皿を洗ったり杏子さんのパフエを作ったりするのよ」

そうなんだフロアって大変なんだな

「一応言っておくが店長にパフエを作る仕事はないからな」

えっ！？そうなの！？

なんだだまされちゃったよ

「そうね杏子さんへパフエを作るのは私の仕事よね」

「それも違うがな・・・」

まあいい。

俺はキッチンの佐藤潤だ。

とりあえずキッチンは料理を作るだけだ。

鍋とかは重いから体力があるやつにお勧めだ」

この人見た目は怖そうだけど優しい人だなー

「とまあそういうわけで今から紙を渡すからそらにどっちがいいか書いてくれ」

（紙に記入中）

「明久くんどうするんですか？」

「ぼくはどうしようかな。

姫路さんはもちろん（キッチンです）それはやめよう。
姫路さんはフロアにするべきだよ」

「明久グッジョブだ」

「・・・グッジョブ」

「そうですか？

・・・じゃあそうします。

明久くんもフロアに来てくれますか？」

「／／／／もちろんだよ」

姫路さんと一緒に仕事なんてうれしいな

「／／／うれしいです」

「ところで雄二たちはどうするの？」

「俺はキッチンだ」

「・・・俺もキッチン」

「わしは演技のためにもフロアじゃ」

「・・・私は雄二と一緒に」

「ウチはどうしようかしら・・・
やっぱりホールにしようかしら」

「僕はどうしようかな」

ムツツリー二君どっちがいいと思う?。」

「・・・制服姿をみたい(どっちでもいい)」

「／／／じゃあそうしようかな」

ムツツリー二本音が駄々漏れだよ・・・

「決まっただけだな。」

それじゃあ休憩室でほかのやつが待ってるからそこで自己紹介をしてくれ」

「「「「「はい」「」「」「」「」

自己紹介か・・・

学校でのような失敗をしないようにしよう!!

このときぼくはあんなひどい自己紹介になるなんて思いもしなかった・・・

仕事説明？（後書き）

なんかキャラをあらわしていない気が・・・

どうぞアドバイスお願いします。

感想もお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7376y/>

バカとバカでワグナリア

2011年11月30日17時56分発行